

後漢時代の巫者について

はじめに

筆者は先に『前漢時代の巫者について』の論稿を発表し、漢初、高祖は天下統一をなし遂げた紀元前二〇一年に都長安に七巫を設置し、七巫はそれぞれ異った神々を祀った。しかし、この七巫は『漢書』百官公卿表には見えず、国家の祭祀を掌る太常の属官にも見えない。ただ七巫のうち五巫は宮中における祭祀を担当し、国家レベルの祭祀を担当していない。つまり宮中だけの祭祀と、郡国制を採用していた当時、諸侯は諸侯の祭祀を行うという二系列で、祭祀の挙国一致体制を行うことが出来なかった。文帝時代になって漸く諸侯の有していた祭祀権をとりあげて国家主催の祭祀を行うことが出来る様になった。この傾向は中央集権体制を確立した武帝時代になると更に多くの祭祀が行われる。祭祀を重要視した武帝は、元狩五年（前一一八）、病氣治癒に巫者が関わったことから祭祀の中に新たに呪術的要素をとりこむことになり、また社会不安の増大から一般の人々の生活の中にもより

多くの呪術的要素が浸透し、巫者の活発な活動が見られる。武帝は晩年、匈奴征伐からくる疲弊等を悔い、天漢二（前九九）年に巫者による祭祀をとりしまったが、一旦社会に深く浸透した巫者の活動は止むことなく、また武帝後の宣帝・成帝が後嗣に恵まれない事なども手伝って巫者の活動はより活発になった。巫者の活動がより活発になった背景には、武帝時代の儒教国教化政策の実施により、元帝時代頃より儒家的教養を身につけた官僚達が多く中央政界に進出し、非儒家的なものゝ呪術的要素をもつものの排除を推進したために巫者達が危機意識をもち、巻き返しを計ろうとしたことがあったと思われる、と論じた^①。社会の混乱や不安が大きくなればなる程、人々の生活が不安になればなる程呪術的要素が人々に大きな影響を与えることが考えられるが、その意味では王莽の時代を経て漢王朝の復活を果した後漢王朝も、前漢王朝と同様に混乱からのスタートである。その様な中、巫者の置かれた立場は前漢時代と異っていたのだろうか、また巫者達はどの様な活動をしたのかについて述べてみる。

藤 田 忠

一

先ず、後漢時代の人々は巫者（巫術）をどの様に見ていたのであろうか。

桓譚『新論』に、

昔楚靈王驕逸輕下、簡賢務鬼、信巫祝之道、齋戒潔鮮、以祀上帝、禮群神……吳人來攻、其國人告急、而靈王鼓舞自若、顧應之曰、寡人方祭上帝、樂明神当蒙福祐焉、不敢赴救、而吳兵遂至、俘獲其太子及后、甚可傷

とある。桓譚は『後漢書』桓譚列伝第十八上によると、光武帝（在位二五〇五七）の時、大司空宋弘の推薦により議郎給事に任ぜられており、後漢初めの人である。彼は楚靈王の故事を引用して、巫祝の道を信じて齋戒潔斎して上帝を祀り、群神を礼して、吳人が攻め来り、国人が急を告げて救助を求めても、鼓舞自若として救援に赴かなかつたため、遂に皇太子と皇后が俘虜となつたのは非常に痛ましいことだ、と言っている。桓譚の発言の背景は今一つはっきりとしないが、『新論』に

余爲新論述古今、亦欲興治也、何異春秋褒貶耶、今有疑者、所謂蚌異蛤、二五爲非十也

とあり、彼の意図するところは、古今の事を述べて政治をさかんにしようとするにあり、その方法として『春秋』の毀誉褒貶を用いる。蚌と蛤はよく似たものであるが異なるものであるという。つまり祭祀を

行うことは正しいことであるが、祭祀を行うにあたって巫祝によるのではなく、正式な手順を経て正しい方法で行うべきであると、当時の社会を批判したものと考えられる。

次に、『論衡』^③卷三十、自紀篇によると、建武三（二七）年に生まれ桓譚と殆んど同時代の王充についてみてみよう。卷二十五、解除篇の末尾に、

今世信祭祀、中行子之類也、不修其行而豐其祝、不敬其上而畏其鬼、身死禍至、歸之於祟、謂祟未得、得祟修祀、禍繁不止、歸之於祭、謂祭未敬、夫論解除、解除無益、論祭祀、祭祀無補、論巫祝、巫祝無力、意在人不在鬼、在德不在祀、明矣哉

とある。解除とは前稿で触れた如く、自己に降り懸る災禍を排除したり、災禍の発生を予防することである。中行子とは戦国時代、晋の卿で智伯に滅ぼされた中行寅の故事のことである。今の世の中、祭祀を信ずることは中行子の故事のようで、日頃の行いを修業せず巫祝を豊かにし、政府を尊敬せずに鬼神を畏怖して、死亡したり災禍が起ると祟りに原因を求めて、祟りはまだ出ていないという。祟りが出るとはじめて祭祀を行い、災禍が頻繁にあらわれて止らなくなると祭祀に原因を求めて、祭祀がまた十分に尊敬されていないからだという。この様な風潮に対して、王充は最後にきっぱりと、解除なんて何の利益もないものであり、祭祀なんて何の助けにもならないし、巫祝なんてなんの力も持っていないのだ。要はその人に在って鬼神にあるのではなく、徳目にあるのであって祭祀にあるのではない、と結論づけている。

桓譚よりもより厳しく巫祝を否定している。

右の様に、後漢時代前半の二人は巫祝に対して、彼らの活動を否定するか或いは巫祝の力を信用していない。この事は前漢時代と全く同じであると言える。彼ら二人をしてこの様な発言が出ていた事は、後漢前半、社会の中に呪術的な要素が多くあり、人々はそれに左右される事が多かったことを伺うことができる。

桓譚、王充より少し後代の王符は次のように言っている。

『後漢書』王符伝第三十九に、

浮侈篇曰……詩刺「不績其麻、市也婆娑」、又婦人不修中饋、休其蠶織、而起學巫祝、鼓舞事神、以欺誣細民、熒惑百姓妻女、羸弱疾病之家、懷憂憤憤、易爲恐懼、至使奔走便時、去離正宅、崎嶇路側、風寒所傷、姦人所利、盜賊所中、或增禍重崇、至於死亡、而不知巫所欺誤、反恨事巫之晚、此妖妄之甚者也

とある。章懷太子⁶の注によると、婦人達は自分達の仕事をせず、市中に出向いて歌舞して神に仕えたり、食事の支度をせず、織物をしないで怠けて巫祝を学び、鼓舞して神に仕えて貧しい人々を欺誣し、人々の妻女を熒惑している。羸弱^{よわよわ}の人・疾病の家では憂を懷いて心おだやかでなく、恐懼しやすい。使者がやってくると都合をつけて奔り出、自宅を離れて道路に苦しみ、風寒に傷つき姦人がつけ入り利用し、盜賊の標的になる。或いは災禍を増し崇を重ねて死亡に至ってしまう。この様な事態を招くのは、巫祝が欺誤するからであるのを理解せず、反って巫に事えるのが遅かったことを恨む。これは妖巫のでたらめさ

の甚しいものである、という。

これによると、巫祝は特に貧しい人や婦女子や弱者・病人等弱い立場にある人々をターゲットにして、欺誣する憎むべき者として捉え、巫祝に対して強い口調で批難している。これは王符の個人的感情に基づく点もあるのかもしれないが、東漢中期以降に見られる社会不安等につけ込む巫祝達にもその原因があるのかもしれない。そのことは『後漢書』仲長統列伝第三十九に、「獻帝遜位之歲、統卒、時年四十一」とあるように、後漢末の人である。彼の『昌言』下に、

然則王天下作大臣者、不待于知天道矣、所貴乎用天之道者、則指星辰以接民事、順四時而興功業、其大略也、吉凶之祥、又何取焉。故知天道而無人略（當作事）者、是巫醫卜祝之伍、不愚不鹵之民也

（嚴可均校輯『全後漢文』卷八九）

と見える。これは巫祝や巫道を直接に批難したものではないが、天下に王たる者で大臣を任命する者は天道を知ること待つのではなく、天下の道を運用するのを貴ぶ者は星座をみて民事を授け、四季に順って功業を興すことが大略である。吉凶の祥は求めなくともよい。故に天道を知って人事に配慮のない王者は巫医卜祝の類で、不愚不鹵の民と同じである、という。巫医卜祝を不愚不鹵と同等視している。『漢書』食貨志卷二四下に見える「工匠醫巫卜祝及它方技商販賈人坐肆列里區謁者」と全く同一の表現であり、巫祝に対して一般の人々より一段下に見ている。

以上の様に、ここにとりあげた桓譚、王充、王符、仲長統らは儒者

や官僚に属する人々で、前漢末に見られた儒者と巫者の対立から、巫者の反撃⁷の後遺症があったのかもしれないが、後漢時代を通じて巫祝の存在を認識の上では正しくないもの乃至は否定すべき存在と考えていたことがわかる。彼らがこの様に考えるに至ったのは何故であろうか。その点を次に考えてみよう。

二

後漢王朝は周知の通り、和帝以降短命な幼少の皇帝が多く続いた。そのために外戚・宦官の対立抗争がくりかえされ、党錮の禁が発生した。政治上の混乱だけでなく、別表の如く和帝永元五（九三）年以降頻繁に凶作や流民⁸が発生し、安帝永初二（一〇八）年以降、盗賊・叛乱が続発している。それらに対して後漢王朝は無論手を拱いて何もしなかった訳でなく、減免、振貸等の対策を講じたであろうが、その対策が何ら有効な解決策となっていないことは繰り返し繰り返し発生する流民群や叛乱等を見れば納得がゆくであろう。特に靈帝中平元（一八四）年に発生した黄巾の乱は後漢王朝滅亡の主要因となったことは言うまでもないが、その兆候は既に順帝（一二六―一四四）年の頃に遡ることができる。『後漢書』襄楷伝第二十下に、

初、順帝時、琅邪宮崇詣闕、上其師于吉於曲陽泉水上所得神書百七卷、皆縹白素朱介青首朱目、號太平清領書、其言以陰陽五行爲家、而多巫覡雜語、有司奏崇所上妖妄不經、迺收藏之、後張角頗有其書焉とある。琅邪の宮崇が宮城にやって来て、彼の師于吉が曲陽泉で得た

とされる青白色の縑で、朱で縁どりをした青首朱書の「太平清領書」と言われる神書を上納してきた。その中味は、既に外形上からも推察のつく陰陽五行説が中心であり、巫覡の雜語が多く混っているものであったため、有司は宮崇の上納した「太平清領書」は經典ではないとして没収した、という。宮崇はいかなる人物であるかは定かではないが、その師于吉（于吉とも言われる）は琅邪の人で呉会にやって来て、精舎を建て符水でもって病氣治療を行った人物で（江表伝）、所謂の呪術でもって病氣治療を行う巫祝の人物である。そして章懷太子注引く「太平經」によると、

天上有常神聖要詔、時下授人以言、用使神吏應氣而往來也、人衆得之謂神呪也、呪百中百、十中十、其祝有可使神爲除災疾、用之所向無不愈也

と見え、天上にいる神が時々降下してきて、人々に言葉（神呪）を与える。それは百発百中であって災疾を取り除いてくれる、という完全に呪術そのものである。この様な内容の書物であったが故に有司は「妖妄不經」であるとして没収したものであろう。有司が「太平清領書」を排斥したことは、順帝時代から既に巫者の活動が活発に見られたことを示すとともに、別表からもわかる様に、特に海賊、盗賊等の活動が多く発生している。そのために有司は巫者等の呪術的要素が人々に影響を与えることに神経をとがらし、巫者を敵対視して書物の没収となったのではなからうか。

一方、巫者達は社会不安につけこんで、様々な活動を行っている。

『風俗通義』卷九怪神に、

九江遂適有唐・居山、名有神、衆巫共爲取公嫗、歲易、男不得復娶、女不得復嫁、百姓苦之

とある。九江の遂適にある唐山、居山二山に神が住んでいるとして、衆巫達がその神の爲に尸として山公、山嫗を差し出させ、歳が改まると、その男は嫁をとることが出来ず、女は嫁ぐことが出来ずに人々は苦しんでいた。衆巫達が彼らの呪術で人々を畏れさせていたと考えられるが、この事態に対して著者応邵は、

謹按時太守宋均到官、主者白出錢給聘男子女、均曰衆巫與神合契、知其旨欲、卒取小民不相當、於是勅條巫家男女以備公嫗、巫扣頭服罪、乃殺之、是後遂絶

という。『後漢書』宋均伝第三十一によると、これは中元元（五六）年のことであり、順帝時代以前のことであるが、宋均が九江太守として赴任した時に、従来一般の人々から尸を選出していたのをやめ、巫家の男女を山公・山嫗に選出するように改めさせた結果、巫は扣頭し罪に服し遂にこの様な風習は廃絶した、という。

また、『後漢書』樂巴伝第四十七に、
順帝世……（樂巴）再遷爲豫章太守、郡土多山川鬼怪、小人常破貨産以祈禱、巴素有道術、能役鬼神、乃悉毀壞房祀、翦理姦巫、於是妖異自消、百姓始頗爲懼、終皆安之

とある。順帝時代（一二六―一四四）に予章太守に任命された樂巴が、その土地に山川の靈や鬼怪なことが多く、人々は破産までして祈禱し

ているのを見て、房堂（祭祀を行う場所）をとり壊し、姦巫を剪りおさめた結果、妖異は自然に消滅した。この様な行為に対して、小人だけでなく人々は最初非常に懼れていたが、最後には安心した、という。この二例は後漢王朝の初めと中頃の出来事であり、場所は九江と予章と中央から離れており、土地柄も考えられるが巫祝に苦しめられる人々が浮びあがる。そして赴任した一官吏個人（宋均・樂巴）の力や巫者に対する考え方に依る所から呪術的なものの打倒にむかわせたのであろうが、打倒が可能であった背景は言うまでも無く国家権力を背景とした官吏であったからで、そうでなければ打倒できなかったかもしれない。

以上の様に、後漢王朝は、巫者の活動に対して、彼らが社会に及ぼす影響力を軽視したり無視するのではなく、一貫して抑圧する方針をもっていたことがわかる。しかし、後漢時代を通じて絶え間なく、巫祝の活動が見えることは、政府が鎮圧してもその場限りであったことを示すものであると同時に、社会情勢が不安定で、一般の人々は政府の施策に信頼を置くことが出来ず、別表に見えるように叛乱や盜賊や凶作等が多発していて、心の安らぎを求めようとすれば身近にある呪術的なものに頼らざるをえなくなる。巫祝はまたそれにつけ込むという悪循環をくり返すことになったのであろう。

三

では後漢時代の人々は実際に巫者に対してどの様な様子であったの

かを見ることにしよう。

先に引用した『後漢書』王符伝引く浮侈篇には見えないが、『潜夫論』卷三、浮侈篇に

或棄醫藥往事神、故至於死亡、不自知爲巫所欺誤、乃反恨事巫之晚、此熒惑細民之甚者也

とあり、医業（医者）を信用しないで巫を信用し、しかも巫に欺かれていることを知らない人々の姿を見ることが出来る。さらに衛宏『漢舊儀補遺』卷下に

昔顓頊氏有三子、生而亡去、爲疫鬼、一居江水爲瘧鬼、一居若水爲罔兩蠱鬼、一居人宮室區隅漏庚、善驚人小兒、於是以歲十二月、使方相氏蒙虎皮、黃金四百分、衣丹裳、執戈持盾、帥百吏及童子、而時儼以索室中、而殿疫鬼

とある。『後漢書』礼儀志中第五によると、逐疫の礼は臘の前日に行われ、『大儼』ともいう、とある。昔、顓頊の三人の子供は誕生して逃げ去って疫鬼やひのりとなった。江水にいる瘧鬼、若水にいる罔兩蠱鬼、宮室の区隅にいる小兒鬼となった。そこで年の終りに方相氏に疫鬼を追ひ払うことをさせる、という。この逐疫の例には巫者の姿は直接に見えないが、『文選』卷三、張中子（衡）の『東京賦』に

爾乃卒歲大儼、毆除群厲、方相秉鉞、巫覡操列、偃子萬童、丹首玄製、桃弧棘矢、所發無臭、飛礫雨散、剛瘡必斃、煌火馳而星流、逐赤疫於四裔

と見えている。大意は年末に追儼（逐疫）の法を行い、悪鬼を逐ひ払

う。方相氏は鉞を持ち、巫覡は剣を持ち、童男童女を選び赤色の帽子をつけ黒衣を着て、桃弧棘矢を放し、雨のように石を投げつけるとさすがの剛鬼も皆死す。さらに炬火を持って赤疫（疫鬼患者）を四海に攘う、というものであろう。つまり逐疫には方相氏や巫覡が疫鬼を追ひ払う役目を担っていることがわかる。疫癘の発生の予防や発生した後の解除を行うことが巫祝の職務の一つであったと考えられる。また既に前稿でも、皇帝の後嗣をめぐり媚道を行うことがあることに触れたが、『詩経』陳風の鄭玄の詩譜及び疏にも

大姫無子、好巫覡禱祈鬼神歌舞之樂、民俗化而爲之、……地理志又云、婦人尊貴、好祭祀、不言無子、鄭知無子者、以其好巫好祭、明爲無子禱求、故言無子……杜預曰陳風之出者、蓋大姫於後生子、以禱而得子、故彌信巫覡也

とある。陳胡公嬀滿の大姫に子供がなく、巫者に頼んで漸く子供を得たことにより、一般の人々の間にもこの様な風習が広がって、子供を授かることを願う時に巫者に依頼するようになったのだという。誕生に関する事がある以上、その反対の葬喪に関することも当然ある。『後漢書』袁安伝第三十五に、

初、安父沒、母使安訪求葬地、道逢三書生、問安何之、安爲言其故、生乃指一處、云、葬此地、當世爲上公、須臾不見、安異之、於是遂葬其所占之地、故累世隆盛焉

とある。袁安の父がなくなり、母に言われて墓所を探す途中に三人の書生に遭い、彼らの指示に従って埋葬したところ、代々隆盛した。袁

安の場合も巫者は直接に見えないが、前漢の例からすると巫者の存在は考えられる。この様に人の生死に関する事柄に巫者の存在を伺うことが出来る。

また、『後漢書』循吏伝第六十八の孟嘗の条に、

孟嘗、字伯周、会稽上虞人也……仕郡爲戸曹史、上虞有寡婦至孝養姑、姑年老壽終、夫女弟先懷嫌忌、乃誣婦厭苦供養、加鳩其母、刑訟縣庭、郡不加尋察、遂結竟其罪……婦竟冤死、自是郡中連旱二年、禱請無所獲、後太守殷丹到官、訪問其故、嘗詣府具陳寡婦冤誣之事……卽刑訟女而祭婦墓、天應澍雨、穀稼以登

とある。上虞の極めて姑孝行の寡婦の姑が天寿を全うして死去した時、姑の妹が以前に寡婦に嫌な思いを懷いていたため、寡婦が母をいとい苦しめ鳩毒を盛って殺害したのだと県庭に誣告した。郡では十分に審理せず結審したため寡婦は冤死した。彼女の死後二年間、郡中は旱り続きで禱祀したが効果なく収穫がなかった。のち太尉殷丹が赴任してきて、早の理由を求めた時に、戸曹史の孟嘗が役所に到って寡婦冤誣事件を詳細に陳べた。その結果姑の妹が認められ、寡婦の墓を祭祀したところ澍雨がふり穀物が稔った、という。早害発生の原因が無実の罪で死去した厲鬼の祟りのためであり、早害を除くには厲鬼の恨み（冤罪）を払う必要があり禱祀する。先の人の生死と異なり、死後の事に関する出来ごとであるがやはり祭祀を行って、巫者がそれに關つていたことが考えられる。

媚道の例も前漢時代と同じく後漢時代にも見える。『後漢書』章帝

八王列伝第四十五の清河孝王慶の条に、

（明德馬）太后崩後、竇皇后寵盛、以（宋）貴人姊妹並幸、慶爲太子、心内惡之、與母比陽主謀陷宋氏、外令兄弟求其纖過、内使御者偵伺得失、後於掖庭門遽遮得貴人書、云「病思生菟、令家求之」、因誣言欲作蠱道祝詛、以菟爲厭勝之術、日夜毀謗、貴人母子遂漸見疏。

とある。章帝の竇皇后に子供がなく、宋貴人の子供慶が太子になると、皇后は母親と謀って外にごく些細な過失を、内に御者に得失を伺わせ、掖庭門で宋貴人の書をうばいとりあげて「病思生菟、令家求之」と、菟厭勝の術により蠱道祝詛をせんと証言して、最後には宋貴人母子ともに疏ぜられるようになった、という。この祝詛はやはり宮中内に発生したものであって、民間ではないが巫祝が関わっていることがわかり、やはり民間に於いても同じ様な事があったと推測される。

更に巫祝が關係する事例についてみよう。『論衡』卷二十四、弁祟篇に、

世俗信禍祟、以爲人之疾病死亡、及更患被罪戮辱懽笑、皆有所犯、起功、移徙、祭祀、喪葬、行作、入官、嫁娶、不擇吉日、不避歲月、觸鬼逢神、忌時相害、故發病生禍、結法入罪、至於死亡、殫家滅門、皆不重慎犯觸忌諱之所致也

とある。これに依ると、漢代の人々は禍祟を信じていて、人間の病氣死亡、災難、刑罰や戮辱、懽笑はみな人々が規律を違犯するところから起るものである。仕事を始めること、転居、祭祀、喪葬、出かけて

行つて仕事をしたり、仕官したり、嫁娶等も吉日を択ばなかったり、忌諱に當る日月を避けないと鬼神に触れたり出くわすことになり、忌むべき時がお互いに害を与えあう。だから病氣になつたり禍を生じたり、法にふれて罪をうけ、死亡に至つたり、家がつきたり一族が滅亡したりする。これらは皆深く慎んで忌諱にふれないようにしない為に生じてくる、という。漢代の人々は日常生活に關係する全ての事に鬼神が關係すると考えていたと思われる。この鬼神と交信することが出来る者が巫者である。それ故に一般の人々は日常生活の中で起つてくる通常と異つた出来事があると、それは鬼神によって引き起された諸現象で、自分達で対処出来ないものと思つて、巫者に頼ることで、災異から逃れたいと思つたのであらう。一方、官吏達からすれば、社会秩序を維持する規律があるにも拘らず、巫者はそのルールに則つて物事を処理するのでないが故に、巫者が人々の生活の中に入り込むことを拒否せねばならなかつたのであらう。

四

巫者の存在は、上述の様にそれに頼らざるを得ない一般の人々と、社会のルールに則つて社会秩序維持を求める官吏の間に介在していたが、巫者は本当に社会の混乱を招く原因を作り出すものとして取締りを強行すれば可能であつたはずである。では何故に国を挙げて取締が行われなかつたのだろうか。

今少し具体例を通して考えてみよう。

『後漢書』張奐列伝第五十五に、
 (張奐) 在家四歳、復拜武威太守、……其(河西)俗多妖忌、凡二月、五月産子及與父母同月生者、悉殺之 奐示以義方、嚴加賞罰、風俗遂改¹³⁾

とある。張奐が武威太守に任命された時、河西の風俗には妖忌な事が多くあつた。その中の一つに、二月、五月生れの子供と父母と同月に生れた子供はすべて殺してしまうという風俗があつた。張奐は正しいあるべき道(義方)を示して厳しく賞罰を加えて、その風俗を改めたという。この様な俗説は河西地方だけでなく、漢代には広く行われていたらしく、『風俗通義』卷一、正失篇の彭城相袁元服の条にも見え、それに対して応劭も、

謹按……今俗間多有禁忌生三子者、五月生者、以爲妨害父母、服中子犯禮傷孝、莫肯收舉

と述べて、三人目の子供、五月生れの子供は父母を妨害し、服喪中に生れた子供は礼を犯し孝を傷つけるからとりあげない、という迷信俗説を紹介している。二月、五月生れの子供を救う方法は示されていないが、張奐が義方を示すことによって風俗が改つたとは、当然、張奐という一地方官吏の力でなく、彼の背景にある国家権力がこの風俗を廃止に追い込んだものであらう。

『後漢書』第五倫伝第三十一に、
 會稽俗多淫祀、好卜筮、民常以牛祭神、百姓財產以之困匱、其自食牛肉而不以薦祠者、發病且死先爲牛鳴、前後郡將莫敢禁、倫到官、

移書屬縣、曉告百姓、其巫祝有依託鬼神詐怖愚民、皆案論之、有妄屠牛者、吏輒行罰、民初頗恐懼、或祝詛妄言、倫案之愈急、後遂斷絕、百姓以安

とある。会稽の風俗では淫祀が多く、卜筮を好んで、人々は常に牛を殺して神を祭祀していたため、人々は財産が乏しかった。自ら牛肉を食べながら牛を供えて祭祀しない者が発病して死にそうになると、先ず牛の為に鳴いて（謝るような）風習があった。しかし周辺の郡でも屠牛を禁止する者がいなかった。第五倫が赴任して属下の県に布告をし、「巫祝が鬼神にかこつけて人々を欺き脅すことがあれば、一つづつ調べて罪を決め、妄りに牛を殺す者は役人が処罰する」とした。人々ははじめ非常に恐懼したり、祝詛してたらめなことを言っていたが、第五倫が取り調べを厳しくしたので、遂にこの風習はなくなり人々もやっと安心した、という。

この様な例は、先の『後漢書』樂巴伝第四十七にも見えていて、破産してまでも祭祀を行う予章地方の風習が、樂巴が太守として赴任し、房堂を取り壊し、姦巫を剪りおさめた結果、漸やく妖異が消滅するというのが出来た。このように一般の人々は巫者に対して何もすることが出来ず、また官吏がその方向を打ち出しても急には改まらず、官吏が強更に対処してはじめて可能であったことがわかる。また、第五倫の場合で見ると、彼の前任者達は淫祀禁止措置をとっておらず、巫者達の当該地域での影響力の大きさを示しているのではないだろうか。また注目すべき点は、第五倫の場合には見えないが、樂巴の場合、彼

自身が道術を見につけていて、鬼神を役使する方法に通じていたことである。『後漢書』方術伝第七十二下に、

又河南有翹聖卿、善爲丹書符効、厭殺鬼神、而使命之

とあり、翹聖卿は丹書の魔除けふだを作って鬼神を厭し殺したり、役使したりする、⁽¹⁾という。鬼神をコントロールすることやその方法は、翹聖卿伝の注引く集解に

惠棟曰、古有効鬼法、淮南本經云、昔者蒼頡作書而天雨粟、鬼夜哭、高誘注云、鬼恐爲書文所効、故夜哭、然則効鬼之法、不始於東漢とあって、文書を作製して鬼神を懲らしめる方法が古くから行われていたことがわかる。

ところで、『後漢書』方術伝第七十二上によると、所謂の方術と称されるものにはいくつかあるが、本来この道は奥深く、奥義は神秘で極めがたいものである。だから聖人も怪力乱神を語らず、性命についてもめったにいわなかった（斯道隱遠、玄奥難原、故聖人不語怪神、罕言性命）。しかし武帝が大いに方術を好んでから、天下の何がしの術を身につけた士があらわれ（漢自武帝頗好方術、天下懷協道藝之士）。その後王莽が天下を欺くのに符命を用い、光武帝が讖緯を信じた（後王莽矯用符命、及光武尤信讖言）。この様な状況に対してすぐれた儒者達はそれらが欺満にみち不經であると怒り、悲憤慷慨の上奏文を奉じた（是以通儒碩生、忿其姦妄經經、奏議慷慨）とある。

後漢時代になって、光武帝が讖緯説を信ずるようになって方術の士が増加したであろうことは推測できるが、方術の奥義を極めることは

本来難しく、またその人の資質にも左右され、誰でもが訓練して簡単に修得できるものではない。それ故に、その様な方術を身につけ、官吏となった者はごくわずかであつたろうと思われる。

樂巴や魏聖卿は、この様な本当の方術（巫祝）に通じていて、そして裏の欺満や詐欺まがいの世界にも通じていたため、その地方で行われた風俗に立ちむかい、政治力でもって廃止することが出来たのである。この事は増淵氏が当時巫祝の徒のおかれた社会的立場や縦横の結びつき——地方官吏や民間の豪長者（土豪・豪俠）、遊俠——により社会の裏側に大きな力をもっていた、と指摘される通りであろう。第五倫の場合は、方術を身につけていたことは彼の伝に見えないが、

第五倫、字伯魚……少介然有義行、王莽末盜賊起、宗族閭里爭往赴之、倫廼依險固築宮壁、有賊輒奮其衆、引強持満以拒之（第五倫傳）とあり、若い時より義俠の道を歩み、王莽末の混乱時に一族や近隣の人々が盜賊に参加したが、倫は逆に地勢を利用して、砦を築いて、人々を引っぱって防衛している。また、張奐の場合も

張奐、字然明……少遊三輔、師事太尉朱寵、學歐陽尚書、……復舉賢良、對策第一、擢議郎（張奐傳）

とあり、儒学（尚書）を学んでおり、巫祝の欺満に憤慨し抗議出来る立場にあつたことがわかる。

以上のように、巫祝の社会に与える影響は非常に大きなものであつたが、後漢王朝は彼らのもつ呪術的要素を真正面から否定したり、拒否したりすることはなく、また有力者と通じたりしていたため、一部

の巫祝の社会に通じていると思われる者が個人的に対処するだけであつた。それは後漢王朝の社会が巫祝の存在を否定するものではなかつたからであろう。

五

巫者が人々の生活の中に深く浸透していたことはくり返し述べた通りである。では、彼らの活動する拠点は具体的にはどこであるのだろうか、それを次に見ることにしよう。

漢代祭祀の行われる場所として考えられるものには幾つかある。その一つに宗廟や陵寢がある。宗廟での祭祀は、皇帝ごとに行つていた祭祀を後漢の明帝の時に太祖廟に木主を集める「同堂異室」にする方法が採用され、また「陵旁立廟」制が行われていたのを「陵寢」に於いて「上陵の礼」に変更し、章帝以降もこの制度を継承したことは嘗て論じたことがある。また、既に多くの先学によって論じられている「社」（「社稷」）がある。そして社には「国社」、「郷社」、「公社」、「里社」、等がある。これらの社に混つて「私社」もあつたことが知られる。後漢時代の例ではないが、『漢書』五行志第七中之下に、

建昭五年、兗州刺史浩賞禁民私所自立社

とあり、臣瓚注に

舊制二十五家爲一社。而民或十家五家共爲田社、是私社

とある。建昭五（前三四）年に兗州刺史浩賞が私社の建造を禁止している。その前後の背景はわからないが、恐らく兗州地方に限定される

ことかもしれないが、この地に於いての禁令だとしても他地方にも私社が存在していたことを推察せしめるし、臣瓚の注によって二五家ごとに一社があり、それ以下に田社のあったこともわかる。そして『春秋繁露』巻十六、求雨篇^②に、

春旱求雨令縣邑以水日令民禱社、雨幸大澍、奉牲、……諸里社通之於閭外之溝

とあり、春の早魃の時、県邑単位で民に社で祭祀させて、幸いに雨が降ると犠牲を奉じて、里社から外の溝に流すことになっている。求雨や止雨に関しては巫祝が関与していることは既に論じたことがある。また『太平御覽』巻五三二に、

應璩與陰夏書曰、從田來見南野之中有徒步之士、怪而問之、乃知郎君頓有微疴、告祠社神、將以祈福、聞之悵然以增歎息、靈社高樹、能有靈應哉

とある。應璩は後漢の人ではなく、三国時代、建安七子の一人応瑒の弟である。彼が陰夏に与えた手紙に、田畑よりやってきて南の野原を歩いている人を見て、不思議に思っ尋ねてみると、軽い病気に苦しんでいることがわかったので、社神に祈って回復せんことを求めようとした。しかしその人はこの事を聞くとがっかりとして歎息した。霊社の高い樹木にどうして霊能があるのだろうか、とある。民間では社において求雨としたり病氣治癒と祈ったりしていることがわかる。この様な行事は『後漢書』方術伝第七十二下の費長房の条にも

遂能醫療衆病鞭笞百鬼及驅使公社

とあり、費長房は遂に万病を治療し、百鬼を笞うち、公社を駆使する能力を有していた、とある。公社を駆使するとは應璩の話と考へ併すと、恐らく公社の霊を自由に操作することが出来ることを指し、公社の霊の操作可能者とは言うまでもなく巫祝者であろう。

では社の建設の主体は誰であるのだろうか。漢代人々の生活は里を単位として行われ、里が集って亭、亭が集って郷、郷が集って県、県が集って郡になること、そして郡・県は中央政府から官吏が派遣されることは周知の通りである。『後漢書』祭祀志下に、

郡縣置社稷、太守、令、長侍祠、牲用羊豕、唯州所治有社無稷、以其使官

とあり、国家が関与する社（社稷）は県レベルまでであり、郷以下の社はそこに住む人々に関わる問題となる。それ故に先に見たような求雨、祈福、病氣平癒を社に集って行うのであろう。『風俗通義』巻九怪神篇に、

謹按、汝南銅陽有於田得響者、其主未往取也、商車十餘乘經澤中行、望見此響著繩、因持去、念其不事、持一鮑魚置其處、有頃、其主往、不見所得響、反見鮑君、澤中非人道路、怪其如是、大以爲神、轉相告語、治病求福、多有効驗、因爲起祀舍、衆巫數十、帷帳鐘鼓、方數百里皆來禱祀、號鮑君神

とある。田中で響（麋）を得た者が縄でしぼり、持ち去らんと考えたが、だめだと念って鮑魚を置いていた。しばらくして、往くと麋が消えて鮑君がいた。沢中は人の通行路ではなく、怪しみ神と思った。そ

の話があちらこちらに語り告げられると、病氣治癒や福を求める人がやってきて大いに効果があった。そこで祀舎を立て、衆巫数十人がいて、数百里四方から多くの人が参拝にきて「鮑君神」と言われた、とある。一種の「祈請」話であろうが、「祀舎」とはおそらく社に相当するものではなからうか。残念乍ら「祀舎」の建設は誰によってなされたものなのか史料には見えないが、恐らく別表にあらわれる様な連年の流民、叛乱では郷里の人々の生活に余裕はなかったのではなからうか。その様に考えることが許されるならば、次の様な推測が成立するのではないだろうか。郷里では経済的に余裕のある人間が社・祀舎の建設に資金を提供し、そしてそこに活動拠点をおく巫者が存在する。そして『春秋繁露』卷十六、止雨篇の「令縣郷里皆掃社下」や『漢書』卷七十六、韓延壽伝の「春秋郷社、陳鍾鼓管弦、盛升降揖讓」、『太平御覽』卷三六四の「董卓別伝曰：時遭二月社、民在社下飲食、悉就斷頭」に見られるように、人々は一年を通じて社に集り祭祀したり掃除をしたと共通の生活場所となっていたため、巫者との接点も当然生じ、彼らの呪術に頼ると同時に畏怖していたのであろう。

おわりに

後漢時代になっても巫者達は官僚や知識人から、前漢時代と同じようにその存在自体を否定されたり拒否されたりし続けたが、ある意味では前漢王朝よりより厳しい存在であったと思われる。それは、後漢王朝は和帝以降、幼少・短命な皇帝の連続で、宦官と外戚の対立抗争

と前漢時代には見られなかった要素のため社会不安・混乱があり、それに付け込む巫者達の姿が目立ったからかもしれない。

一方、巫者の活動は前漢時代と余りかわることなく、解除、喪葬、祭祀、媚道等が行われているが、上述の様な理由により一般の人々の生活の中に深く浸透している。浸透が度を越えてしまうと、一部の官吏によって取り締りが行われたが、前漢時代のように国を挙げての巫蠱の大搜索や巫祠禁止令等の措置はとられなかった。それは後漢王朝の力がそこまで及ばなかったことであろうが、日常両者は社などを介して共存する生活を過ごしており、政府施策が両者にとって不利益な場合でなくとも、どちらか一方にとっての不利益な場合でも、両者が容易に結びつき、反政府行動を行うような情況が生れつつあったのではないだろうか。詳細は別に論じなければならぬが、別表の後漢末の各地に続発する叛乱に従来見えない「妖賊」なる語句が見え、また増淵氏の「在来の巫術以上のなんらかの新しい宗教的要素や教養」が生れつつあったのではないだろうか。

〈流 民〉

	帝 殤	帝	和
永初元(107)	延平元(106) 和帝末	永元十四 (102) 永元十五 (103)	永元五(93) 永元六(94) 永元七(95) 永元十一 (100)
十一月初子、勅司隸校尉、冀并二州刺史、民訛言相驚、棄捐旧居、老弱相攜、窮困道路(安帝紀)	秋七月庚寅、勅司隸校尉、部刺史曰、聞者郡国或有水灾、妨害秋稼、朝廷惟咎、憂惶悼懼、而郡国欲獲豐穰虚飾之譽、遂覆蔽灾害、多張墾田、不揣流亡、競增戶口(殤帝紀)	四月庚辰、賑貸張掖、居延、敦煌、五原、漢陽、会稽流民下貧穀、各有差(和帝紀) 春閏月乙未、詔流民欲還歸本而糧食者、過所糴粟之、疾病加致医藥、其不欲還歸者、勿強(和帝紀) 恭上疏諫曰……比年水旱傷稼、人飢流冗(魯恭伝)	三月庚寅、遣使者分行貧民、举糴流冗、開倉賑粟三十余郡(和帝紀) 三月庚寅、詔流民所過郡国皆糴之、其有販賣者 勿出租稅、又欲就賤還歸者、復一歲田租、更賦(和帝紀) 丙寅、詔曰……陰陽不和、水旱違度、濟河之域、凶饉流亡……(和帝紀) 出為河内太守、時春夏大旱、糧穀踊貴、糴到、乃省吏并職、退去姦殘、樹雨數降、其秋大孰、百姓給足、流冗皆還(曹褒伝) 春二月、詔……郡国流民、聽入陂池漁采、以助蔬食(和帝紀) 三月丙申、詔曰、比年不登、百姓虚遺、京師去冬無宿雪、今春無樹雨、黎民流離、困於道路(和帝紀)

〈叛 乱〉

	帝 殤	帝	和
	延平元(106)	之興之(106) 春、高句麗寇郡界(和帝紀)	永元五(93) 是歲、武陵郡兵破叛蛮、降之(和帝紀) 永元八(96) 南匈奴右温禺犢王叛、為寇(和帝紀) 永元十一 (100) 夏四月、日南、象林蛮夷反、郡兵討破之(和帝紀) 永元十三 (101) 十一月辛卯、巫蛮叛、寇南郡(和帝紀)
	夏四月、鮮卑寇漁陽、漁陽太守張頭追擊、戰没(和帝紀)		

順帝		安帝	
永建六(131)	永建二(127)	永初一(107)	永初二(108)
春正月甲辰詔稟實荊、豫、兗、冀四州流冗貧人、所在安業之、疾病致医藥(順帝紀)		參於徒中使其子俊上書曰、方今西州流民擾動、而徵發不絕、水潦不休、地力不復(龐參伝)	永初二(108)
冬十一月辛亥詔曰、連年灾潦、冀部尤甚、比蠲除実傷、瞻恤窮匱、而百姓猶有棄業、流亡不絶(順帝紀)		永初三(108)	永初四(108)
		永初五(108)	永初六(108)
		永初七(108)	永初八(108)
		永初九(108)	永初十(108)
		永初十一(108)	永初十二(108)
		永初十三(108)	永初十四(108)
		永初十五(108)	永初十六(108)
		永初十七(108)	永初十八(108)
		永初十九(108)	永初二十(108)
		永初二十一(108)	永初二十二(108)
		永初二十三(108)	永初二十四(108)
		永初二十五(108)	永初二十六(108)
		永初二十七(108)	永初二十八(108)
		永初二十九(108)	永初三十(108)
		永初三十一(108)	永初二(109)
		永初三(109)	永初四(109)
		永初五(109)	永初六(109)
		永初七(109)	永初八(109)
		永初九(109)	永初十(109)
		永初十一(109)	永初十二(109)
		永初十三(109)	永初十四(109)
		永初十五(109)	永初十六(109)
		永初十七(109)	永初十八(109)
		永初十九(109)	永初二十(109)
		永初二十一(109)	永初二十二(109)
		永初二十三(109)	永初二十四(109)
		永初二十五(109)	永初二十六(109)
		永初二十七(109)	永初二十八(109)
		永初二十九(109)	永初三十(109)
		永初三十一(109)	永初二(110)
		永初三(110)	永初四(110)
		永初五(110)	永初六(110)
		永初七(110)	永初八(110)
		永初九(110)	永初十(110)
		永初十一(110)	永初十二(110)
		永初十三(110)	永初十四(110)
		永初十五(110)	永初十六(110)
		永初十七(110)	永初十八(110)
		永初十九(110)	永初二十(110)
		永初二十一(110)	永初二十二(110)
		永初二十三(110)	永初二十四(110)
		永初二十五(110)	永初二十六(110)
		永初二十七(110)	永初二十八(110)
		永初二十九(110)	永初三十(110)
		永初三十一(110)	永初二(111)
		永初三(111)	永初四(111)
		永初五(111)	永初六(111)
		永初七(111)	永初八(111)
		永初九(111)	永初十(111)
		永初十一(111)	永初十二(111)
		永初十三(111)	永初十四(111)
		永初十五(111)	永初十六(111)
		永初十七(111)	永初十八(111)
		永初十九(111)	永初二十(111)
		永初二十一(111)	永初二十二(111)
		永初二十三(111)	永初二十四(111)
		永初二十五(111)	永初二十六(111)
		永初二十七(111)	永初二十八(111)
		永初二十九(111)	永初三十(111)
		永初三十一(111)	永初二(112)
		永初三(112)	永初四(112)
		永初五(112)	永初六(112)
		永初七(112)	永初八(112)
		永初九(112)	永初十(112)
		永初十一(112)	永初十二(112)
		永初十三(112)	永初十四(112)
		永初十五(112)	永初十六(112)
		永初十七(112)	永初十八(112)
		永初十九(112)	永初二十(112)
		永初二十一(112)	永初二十二(112)
		永初二十三(112)	永初二十四(112)
		永初二十五(112)	永初二十六(112)
		永初二十七(112)	永初二十八(112)
		永初二十九(112)	永初三十(112)
		永初三十一(112)	永初二(113)
		永初三(113)	永初四(113)
		永初五(113)	永初六(113)
		永初七(113)	永初八(113)
		永初九(113)	永初十(113)
		永初十一(113)	永初十二(113)
		永初十三(113)	永初十四(113)
		永初十五(113)	永初十六(113)
		永初十七(113)	永初十八(113)
		永初十九(113)	永初二十(113)
		永初二十一(113)	永初二十二(113)
		永初二十三(113)	永初二十四(113)
		永初二十五(113)	永初二十六(113)
		永初二十七(113)	永初二十八(113)
		永初二十九(113)	永初三十(113)
		永初三十一(113)	永初二(114)
		永初三(114)	永初四(114)
		永初五(114)	永初六(114)
		永初七(114)	永初八(114)
		永初九(114)	永初十(114)
		永初十一(114)	永初十二(114)
		永初十三(114)	永初十四(114)
		永初十五(114)	永初十六(114)
		永初十七(114)	永初十八(114)
		永初十九(114)	永初二十(114)
		永初二十一(114)	永初二十二(114)
		永初二十三(114)	永初二十四(114)
		永初二十五(114)	永初二十六(114)
		永初二十七(114)	永初二十八(114)
		永初二十九(114)	永初三十(114)
		永初三十一(114)	永初二(115)
		永初三(115)	永初四(115)
		永初五(115)	永初六(115)
		永初七(115)	永初八(115)
		永初九(115)	永初十(115)
		永初十一(115)	永初十二(115)
		永初十三(115)	永初十四(115)
		永初十五(115)	永初十六(115)
		永初十七(115)	永初十八(115)
		永初十九(115)	永初二十(115)
		永初二十一(115)	永初二十二(115)
		永初二十三(115)	永初二十四(115)
		永初二十五(115)	永初二十六(115)
		永初二十七(115)	永初二十八(115)
		永初二十九(115)	永初三十(115)
		永初三十一(115)	永初二(116)
		永初三(116)	永初四(116)
		永初五(116)	永初六(116)
		永初七(116)	永初八(116)
		永初九(116)	永初十(116)
		永初十一(116)	永初十二(116)
		永初十三(116)	永初十四(116)
		永初十五(116)	永初十六(116)
		永初十七(116)	永初十八(116)
		永初十九(116)	永初二十(116)
		永初二十一(116)	永初二十二(116)
		永初二十三(116)	永初二十四(116)
		永初二十五(116)	永初二十六(116)
		永初二十七(116)	永初二十八(116)
		永初二十九(116)	永初三十(116)
		永初三十一(116)	永初二(117)
		永初三(117)	永初四(117)
		永初五(117)	永初六(117)
		永初七(117)	永初八(117)
		永初九(117)	永初十(117)
		永初十一(117)	永初十二(117)
		永初十三(117)	永初十四(117)
		永初十五(117)	永初十六(117)
		永初十七(117)	永初十八(117)
		永初十九(117)	永初二十(117)
		永初二十一(117)	永初二十二(117)
		永初二十三(117)	永初二十四(117)
		永初二十五(117)	永初二十六(117)
		永初二十七(117)	永初二十八(117)
		永初二十九(117)	永初三十(117)
		永初三十一(117)	永初二(118)
		永初三(118)	永初四(118)
		永初五(118)	永初六(118)
		永初七(118)	永初八(118)
		永初九(118)	永初十(118)
		永初十一(118)	永初十二(118)
		永初十三(118)	永初十四(118)
		永初十五(118)	永初十六(118)
		永初十七(118)	永初十八(118)
		永初十九(118)	永初二十(118)
		永初二十一(118)	永初二十二(118)
		永初二十三(118)	永初二十四(118)
		永初二十五(118)	永初二十六(118)
		永初二十七(118)	永初二十八(118)
		永初二十九(118)	永初三十(118)
		永初三十一(118)	永初二(119)
		永初三(119)	永初四(119)
		永初五(119)	永初六(119)
		永初七(119)	永初八(119)
		永初九(119)	永初十(119)
		永初十一(119)	永初十二(119)
		永初十三(119)	永初十四(119)
		永初十五(119)	永初十六(119)
		永初十七(119)	永初十八(119)
		永初十九(119)	永初二十(119)
		永初二十一(119)	永初二十二(119)
		永初二十三(119)	永初二十四(119)
		永初二十五(119)	永初二十六(119)
		永初二十七(119)	永初二十八(119)
		永初二十九(119)	永初三十(119)
		永初三十一(119)	永初二(120)
		永初三(120)	永初四(120)
		永初五(120)	永初六(120)
		永初七(120)	永初八(120)
		永初九(120)	永初十(120)
		永初十一(120)	永初十二(120)
		永初十三(120)	永初十四(120)
		永初十五(120)	永初十六(120)
		永初十七(120)	永初十八(120)
		永初十九(120)	永初二十(120)
		永初二十一(120)	永初二十二(120)
		永初二十三(120)	永初二十四(120)
		永初二十五(120)	永初二十六(120)
		永初二十七(120)	永初二十八(120)
		永初二十九(120)	永初三十(120)
		永初三十一(120)	永初二(121)
		永初三(121)	永初四(121)
		永初五(121)	永初六(121)
		永初七(121)	永初八(121)
		永初九(121)	永初十(121)
		永初十一(121)	永初十二(121)
		永初十三(121)	永初十四(121)
		永初十五(121)	永初十六(121)
		永初十七(121)	永初十八(121)
		永初十九(121)	永初二十(121)
		永初二十一(121)	永初二十二(121)
		永初二十三(121)	永初二十四(121)
		永初二十五(121)	永初二十六(121)
		永初二十七(121)	永初二十八(121)
		永初二十九(121)	永初三十(121)
		永初三十一(121)	永初二(122)
		永初三(122)	永初四(122)
		永初五(122)	永初六(122)
		永初七(122)	永初八(122)
		永初九(122)	永初十(122)
		永初十一(122)	永初十二(122)
		永初十三(122)	永初十四(122)
		永初十五(122)	永初十六(122)
		永初十七(122)	永初十八(122)
		永初十九(122)	永初二十(122)
		永初二十一(122)	永初二十二(122)
		永初二十三(122)	永初二十四(122)
		永初二十五(122)	永初二十六(122)
		永初二十七(122)	永初二十八(122)
		永初二十九(122)	永初三十(122)
		永初三十一(122)	永初二(123)
		永初三(123)	永初四(123)
		永初五(123)	永初六(123)
		永初七(123)	永初八(123)
		永初九(123)	永初十(123)
		永初十一(123)	永初十二(123)
		永初十三(123)	永初十四(123)
		永初十五(123)	永初十六(123)
		永初十七(123)	永初十八(123)
		永初十九(123)	永初二十(123)
		永初二十一(123)	永初二十二(123)
		永初二十三(123)	永初二十四(123)
		永初二十五(123)	永初二十六(123)
		永初二十七(123)	永初二十八(123)
		永初二十九(123)	永初三十(123)
		永初三十一(123)	永初二(124)
		永初三(124)	永初四(124)
		永初五(124)	永初六(124)
		永初七(124)	永初八(124)
		永初九(124)	永初十(124)
		永初十一(124)	永初十二(124)
		永初十三(124)	永初十四(124)
		永初十五(124)	永初十六(124)
		永初十七(124)	永初十八(124)
		永初十九(124)	永初二十(124)
		永初二十一(124)	永初二十二(124)
		永初二十三(124)	永初二十四(124)
		永初二十五(124)	永初二十六(124)
		永初二十七(124)	永初二十八(124)
		永初二十九(124)	永初三十(124)
		永初三十一(124)	永初二(125)
		永初三(125)	永初四(125)
		永初五(125)	永初六(125)
		永初七(125)	永初八(125)
		永初九(125)	永初十(125)
		永初十一(125)	永初十二(125)
		永初十三(125)	永初十四(125)
		永初十五(125)	永初十六(125)
		永初十七(125)	永初十八(125)
		永初十九(125)	永初二十(125)
		永初二十一(125)	永初二十二(125)
		永初二十三(125)	永初二十四(125)
		永初二十五(125)	永初二十六(125)
		永初二十七(125)	永初二十八(125)
		永初二十九(125)	永初三十(125)
		永初三十一(125)	永初二(126)
		永初三(126)	永初四(126)
		永初五(126)	永初六(126)
		永初七(126)	永初八(126)
		永初九(126)	永初十(126)
		永初十一(126)	永初十二(126)
		永初十三(126)	永初十四(126)
		永初十五(126)	永初十六(126)
		永初十七(126)	永初十八(126)
		永初十九(126)	永初二十(126)
		永初二十一(126)	永初二十二(126)
		永初二十三(126)	永初二十四(126)
		永初二十五(126)	永初二十六(126)
		永初二十七(126)	永初二十八(126)
		永初二十九(126)	永初三十(126)
		永初三十一(126)	永初二(127)
		永初三(127)	永初四(127)
		永初五(127)	永初六(127)
		永初七(127)	永初八(127)
		永初九(127)	永初十(127)
		永初十一(127)	永初十二(127)
		永初十三(127)	永初十四(127)
		永初十五(127)	永初十六(127)
		永初十七(127)	永初十八(127)
		永初十九(127)	永初二十(127)
		永初二十一(127)	永初二十二(127)
		永初二十三(127)	永初二十四(127)
		永初二十五(127)	永初二十六(127)
		永初二十七(127)	永初二十八(127)
		永初二十九(127)	永初三十(127)
		永初三十一(127)	永初二(128)
		永初三(128)	永初四(128)
		永初五(128)	永初六(128)
		永初七(128)	永初八(128)
		永初九(128)	永初十(128)
		永初十一(128)	永初十二(128)
		永初十三(128)	永初十四(128)
		永初十五(128)	永初十六(128)
		永初十七(128)	永初十八(128)
		永初十九(128)	永初二十(128)
		永初二十一(128)	永初二十二(128)
		永初二十三(128)	永初二十四(128)
		永初二十五(128)	永初二十六(128)
		永初二十七(128)	永初二十八(128)
		永初二十九(128)	永初三十(128)
		永初三十一(128)	永初二(129)
		永初三(129)	永初四(129)
		永初五(129)	永初六(129)
		永初七(129)	永初八(129)
		永初九(129)	永初十(129)
		永初十一(129)	永初十二(129)
		永初十三(129)	永初十四(129)
		永初十五(129)	永初十六(129)
		永初十七(129)	永初十八(129)
		永初十九(129)	永初二十(129)
		永初二十一(129)	永初二十二(129)
		永初二十三(129)	永初二十四(129)
		永初二十五(129)	永初二十六(129)
		永初二十七(129)	永初二十八(129)
		永初二十九(129)	永初三十(129)
		永初三十一(129)	永初二(130)
		永初三(130)	永初四(130)
		永初五(130)	永初六(130)
		永初七(130)	永初八(130)
		永初九(130)	永初十(130)
		永初十一(130)	永初十二(130)
		永初十三(130)	永初十四(130)
		永初十五(130)	永初十六(130)
		永初十七(130)	永初十八(130)
		永初十九(130)	永初二十(130)
		永初二十一(130)	永初二十二(130)
		永初二十三(130)	永初二十四(130)
		永初二十五(130)	永初二十六(130)
		永初二十七(130)	永初二十八(130)
		永初二十九(130)	永初三十(130)
		永初三十一(130)	永初二(131)
		永初三(131)	永初四(131)
		永初五(131)	永初六(131)
		永初七(131)	永初八(131)

順	帝	安	帝
陽嘉元(132)	陽嘉元(132)	永初二(108)	永初四(110)
陽嘉元(132)	陽嘉元(132)	永初三(109)	永初五(111)
二月、海賊曾旌等寇会稽、殺句章、鄞、鄒三縣長、攻会稽東部都尉(順帝紀)	三月、揚州六郡妖賊章河等寇四十九縣、殺傷長吏(順帝紀)	秋七月海賊張伯路等寇略緣海九郡、遣侍御史龐雄督州郡兵討破之、永初四年海賊張伯路復与海、平原劇賊劉文河、周文光等攻厭次、殺県令、遣御史中丞王宗督青州刺史法雄討破之(安帝紀)	朝歌甯季等數千人攻殺長吏、屯聚連年、州郡不能禁、乃以詔為朝歌長……遂殺賊數百人……賊由是駭散(虞詡傳)
		劇賊畢豪等人平原界、……、東郡太守捕得豪等(劉茂伝)	九月漢陽人杜琦、王信叛、与先零諸種羌攻陷上邽城、十二月、漢守太守趙博遣客刺殺杜琦。永初六年、遣侍御史唐喜討漢陽賊王信、破斬之(安帝紀)

帝 桓		帝 冲 · 帝 質				順 帝	
永興元(153)	建和(三)(149)	永熹元(145)	永熹元(145)	永熹元(145)	永熹元(145)	永和末	永和四(139)
秋七月郡国三十二蝗、河水溢、百姓飢窮、流冗道路、至有数十万户、冀州尤甚(桓帝紀)		四月丹陽賊陸宮等圍城、燒亭寺、丹陽太守江漢擊破之(質帝紀) 五月甲午詔曰……又兵役連年、死亡流離、或支骸不歛、或停棺莫収、朕甚愍焉(質帝紀) 廬江盜賊攻尋陽、又攻盱台、滕撫遣司馬王章擊破之(質帝紀) 歷陽賊華孟自称「黑帝」、攻殺九江太守楊岑、滕撫率諸將擊孟等、大破斬之(質帝紀)				規乃上書求乞自効曰……江湖之人、群為盜賊、青、徐荒飢、橫負流散(皇甫規傳)	
						秋八月太原郡旱、民庶流冗(順帝紀)	

帝 桓		帝 冲 · 帝 質				順 帝	
建和元(147)	建和元(147)	建康元(144)	建康元(144)	建康元(144)	建康元(144)	順帝末年 漢安元(142)	陽嘉三(134) 永和二(137) 永和三(138) 永和三(138) 永和六(141) 永和六(141) 永和六(141) 順帝末年
甘陵人劉文与南郡妖賊劉鮪交通、訛言清河王当統天下、欲共立蒜、事覺(章帝八王傳) 陳留盜賊李堅自称皇帝、伏誅(桓帝紀)		九江賊徐鳳馬勉等称「無上將軍」、攻燒城邑(質帝紀) 九江賊黃虎等攻合肥(質帝紀)				三月庚戌、益州盜賊劫質令長、殺列侯(順帝紀) 江夏盜賊殺郗長(順帝紀) 四月、九江賊蔡伯流寇郡界、及廬陵、殺江都長、閏月、降(順帝紀) 五月、吳郡丞羊珍反、攻郡府、太守王衡破斬之(順帝紀) 九江賊周生、范容等起兵攻沒郡縣、至建康元年始平定(天文志中) 賊帥夏密等斂其魁党六百余人、自縛歸首(李固傳) 泰山盜賊屯聚歷年、郡兵常千人追討不能制、固到尽罷(李固傳) 巴郡人服直聚黨数百人、自称「天王」(种嵩傳) 九月、廬陵盜賊張嬰等寇郡界、是歲降、冲帝永熹元年復反、攻殺堂邑、江都長、後為滕撫所平(順帝紀、滕撫傳) 南部江夏盜賊寇掠城邑、州郡討平之(順帝紀)	

桓		帝
永興二(154)	太山賊公孫華偽号歷年……乃以韶為羸長、賊聞其賢、相戒不入羸境。余県多被寇盜、靡耕桑、其流入県界、求索衣糧者甚衆、韶愍其飢困、乃開倉賑之、所稟贍万余戶(韓韶伝)	延熹九(166) 蕃因上疏極諫曰……青、徐炎旱、五穀損傷、民物流遷、茹菽不足(陳蕃伝)
永壽中(155) (157)	是時徐兗二州盜賊群輩、高密在三州之郊、種乃大儲糧積、勤吏士、賊聞皆憚之、桴鼓不鳴、流民婦者、歲終至數千家(第五種伝)	延熹六(163) 蕃上疏諫曰……況当今之世、有三空之厄哉、田野空、朝廷空、倉庫空、是謂三空、加兵戎未戢、四方離散、是陛下焦心毀顏、坐以待旦之時也(陳蕃伝)
光和六(183)	時鉅鹿張角偽託大道、妖惑小民、陶与奉車都尉樂松、議郎袁貢連名上疏言之、曰……前司徒楊賜奉下詔書、切敕	

桓		帝
建和二(148)	十月、長平陳景自号「黃帝子」、署置官属、又南頓管伯亦称「真人」、並圖學兵、悉伏誅(桓帝紀)	
和平元(150)	二月、扶風妖賊裴優自称皇帝、伏誅(桓帝紀)	
永興二(154)	蜀郡李伯詐称宗室、当立為「太初黃帝」、伏誅(桓帝紀)	
永興二(154)	太山、琅邪賊公孫孝等反叛、殺長吏(桓帝紀)	
延熹三(160)	九月、太山、琅邪賊笮丹等復叛、寇掠百姓(桓帝紀)	
延熹三(160)	太山賊叔孫無忌攻殺都尉侯章、十二月、遣中郎將宗資討破之(桓帝紀)	
延熹四(161)	南陽黃武与襄城患得、昆陽桑季託言相署、皆伏誅(桓帝紀)	
延熹五(162)	夏四月長沙賊起、寇桂陽、蒼梧(桓帝紀)	
延熹五(162)	艾県賊樊燒長沙郡県、寇益陽、殺令、又零陵蠻叛、寇長沙(桓帝紀)	
延熹六(163)	桂陽盜賊李研等寇郡界、後為零陵太守陳球所平(桓帝紀・陳球伝)	
延熹六(163)	南海賊寇郡界(桓帝紀)	
延熹八(165)	桂陽胡蘭、朱蓋等復反、攻沒郡県、軫寇零陵、零陵太守陳球拒之(桓帝紀)	
延熹八(165)	勃海妖賊蓋登等称「太上皇帝」、有玉印、珪、璧、鉄券、相署置、皆伏誅(桓帝紀)	
延熹九(166)	沛国戴異得黄金印、無文字、遂与広陵人龍尚等共祭井、作符署、称「太上皇」、伏誅(桓帝紀)	
永康元(167)	廬江賊起、寇郡界(桓帝紀)	

靈	帝	獻
中平元(184)	靈帝末	
中平二(185)	靈帝末	
<p>州郡、護送流民、会賜去位、不復捕録（劉陶伝）</p> <p>交趾屯兵反……有司举琮為交趾刺史……琮即移書告示、各使安其資業、招撫荒散、蠲復徭役、誅斬渠帥為大害者、簡選良吏試守諸県、歲間蕩定、百姓以安（賈琮伝）</p> <p>復上疏曰……今三郡之民、皆以奔亡、南出武関、北徙壺谷、冰駭風散、唯恐在後……（劉陶伝）</p> <p>黄巾余黨郭太等復起西河白波谷、転寇太原、遂破河東、百姓流転三輔、号為「白波賊」衆十余万（董卓伝）</p> <p>韓馥並盛、郡県不能制、百姓苦乱、多流亡入韓者（東夷伝・辰韓）</p>		

靈	帝	
建寧三(170)	光和三(180)	
熹平元(172)	光和六(183)	
<p>冬、済南賊起、攻東平陵（靈帝紀）</p> <p>会稽妖賊許昭起兵句章、自称「大將軍」、立其父為越王、攻破城邑、衆以万数、揚州刺史臧旻率丹陽太守陳奮擊破之、連戰三年、獲昭父子、斬首数千級、平之（靈帝紀、臧洪伝）</p> <p>蒼梧、桂陽猾賊聚、攻郡県、（零陵太守楊璇）梟其渠帥、郡境以清（楊璇伝）</p> <p>（羅彤華『漢代的流民問題』学生書局民国七十九年。林富士『漢代的巫者』稻郷出版、一九七七年。『中国歴代天災人禍表』上、（上海書店、一九八六年をもとに作成）</p>		

注

(1) 拙稿A「前漢時代の巫者について」——七巫を手掛りとして——
〔国士館大学文学部・人文学〕会紀要第二九号、平成八年）、B「前漢時代の巫者について」——武帝時代以降を中心に——〔国士館史学〕第五号、平成九年）

(2) 四部備用本を用いる。

(3) 叢書集成 初篇本を用いる。

(4) 拙稿 B 参照。

(5) 『論衡』卷二五、解除篇の原文に

晋中行寅将亡、召其太祝、欲加罪焉、曰子爲我祀犧牲不肥澤也、且齊戒不敬也、使吾國亡何也、祝簡對曰、昔吾先君中行密子有車十乘、不憂其薄也、憂德義之不足也、今主君有革車百乘、不憂義之薄也、唯患車之不足也、夫船車飾則賦歛厚、賦歛厚則民謏詛、君苟以祝爲有益於國乎、詛亦將爲亡矣、一人祝之、一國詛之、一祝不勝、萬詛國亡、不亦宜乎、祝其何罪とある。

(6) 『後漢書』では「事神之晚」に作るが、『潜夫論』卷三、俘侈篇に従って「事巫之晚」に作る。

(7) 拙稿B、五一頁参照。

(8) 多田狷介「黄巾の乱前史」〔『東洋史研究』第二六卷四期 一九六八年〕参照。

(9) 「善驚人小兒」では「善く人・小兒を驚かす」だけで、鬼は見えないが、『礼稽命徴』には、

顓頊有三子、生而亡去、爲疫鬼、一居江水、是爲瘧鬼魍魎、一居若水、

七六

爲魍魎、一居人宮室區隅、善驚人小兒、爲小鬼、於是常以正歲十二月、令礼官方相氏、蒙熊皮黄金四目玄衣纁裳、執戈揚楯、帥百隸及童子、而時儺以索室、而驅疫鬼、以桃弧菴、矢土鼓、且射之、以赤丸五穀、播洒之、以除疫殃（重修『緯書集成』卷三 明德出版 昭和四十六年、六五頁）とある。

(10) 拙稿B 四三～四四ページ参照。

(11) 拙稿B 四五ページ参照。

(12) この事は『後漢書』卷十、章德皇后伝にも見えている。

(13) この話は『論衡』卷二十三、四諱篇には、

俗有大諱四……四曰、諱舉正月五月子、以爲正月五月子、殺父與母、不得已舉之、父母禍死、則信而謂之真矣、夫正月五月子何故殺父與母、人之含氣在腹腸之内……とある。

(14) 同じく「方術伝」上に見える高獲や「孝明八王伝」第四十に見える梁節王暢もそうである。

(15) 増淵龍夫「漢代における巫と俠」〔『中国古代の社会と国家』弘文堂、昭和三五年、第二章、三、巫祝の社会的勢力と国家秩序との関係、一一二～一一七ページ〕参照。

(16) 拙稿「上陵の礼よりみた明帝の礼制改革」〔『国士館史学』創刊号、一九九三年〕

(17) 代表的なものとして、勞幹「漢代社祀的源流」〔『中央研究院歷史語言研究所集刊』第十一本、民国三三年〕、寧可「漢代的社」〔『文史』第九期、一九八〇年〕、凌純声「中国古代社之源流」〔『中央研究院民族學研究所集刊』第一本、民國三三年〕、

刊』第十七期、民国五三年）、森三樹三郎「秦漢時代に於ける民間祭祀の統一——主として社に就いて——」（『東方学報（京都） 第十一卷第一期、一九四〇年）等がある。

（18）瞿宣穎『中国社会史料叢鈔』甲集（民国二十七年）九、伝説（四六五～五〇五ページ）参照。

（19）注⑩ 四八二～四八四ページ参照。

（20）四部叢刊本による。

（21）拙稿A 一〇二ページ。

（22）劳幹、前掲論文、五一ページ、瞿宣穎、前掲書、四六五ページ参照。

（23）『風俗通義』卷九怪神に「李君神」と題された同じ様な話が見える。

（24）拙稿B、三四～三八ページ参照。

（25）「後漢時代の妖巫の乱と妖賊の乱について」（『国士館史学』第六号、平成十年）

（26）増淵氏前掲書、一一六ページ。

（本学教授・東洋史学）